

優秀演題抄録

2 透析患者の QOL を探る ～地域差から見た見解～

【演 者】立花 涼 【所 属】宮本病院

【共同演者】増田 優太郎（理学療法士）、坂田 禮一（医師）、横瀬 誠治（臨床工学技士）

【キーワード】透析中運動療法、KDQOL

【はじめに】

当院では平成 27 年 6 月より、透析中の運動療法を開始した。前研究では、対象者の心身機能が低下していることが明らかになった。(増田優太郎他、2015)そこで今回は生活の質(以下、QOL)、心理社会的側面に焦点を当て KDQOL-SFTMVersion1.3 日本語版(以下 KDQOL)を用いて追跡調査を行った。

【対象・方法】

当院で外来透析を行っている男性患者 8 名(平均 78 歳、平均透析歴 5.4 年)に対し透析中運動療法介入後時点で KDQOL を実施した。統計学的処理として wilcoxonranksumtest を有意水準 5%と設定し行った。なお、対象者より研究同意書に署名を頂き、当院倫理委員会の承認を得て本研究を開始した。

【結果】

対象者が KDQOL の下位尺度で全国平均を下回ったものは、18 項目中『腎疾患による負担』『透析ケアに対する患者満足度』『身体機能』『日常役割機能(精神)』『心の健康』の 5 項目であった。その中でも『日常役割機能(精神)』が低下する事で他の 4 項目を有意に低下させる事が統計学的処理より確認された。(p>0.05)

【考察】

本研究で、KDQOL の下位尺度が低い数値を示した 5 項目は心理社会的側面に多く、『日常役割機能(精神)』の低下が他の 4 項目を低下させたことが明らかになった。前研究では、ElderlyStatusAssessmentSet(以下、E-SAS)による透析中運動療法対象者の「生活の広がり」を評価し、近隣他者との交流が少ないことがわかっている。『日常役割機能(精神)』の低下と近隣他者との交流機会の低下が KDQOL の下位尺度得点に影響したと考える。透析中の運動療法は「生活の広がり」を改善させた。自宅周辺(庭先やベランダ)から自宅近隣(約 800m)まで生活範囲が拡大した。しかし、地域から考えると 800m 圏内には生活に必要な施設が不十分であり、公共交通機関も充実しているとは言い難い現状がある。高齢かつ透析を行っている対象者は自家用車の使用が困難な為、地域や人との関係性が希薄化した状況が続き、心理社会的閉じこもり傾向になってしまう。その傾向が『日常役割機能(精神)』をはじめとした心理社会的側面を反映する KDQOL の下位尺度得点低下の一因と考える。竹内らは、交通の便の悪い地域高齢者の活動の中で、近隣他者との交流や社会活動の結果が QOL を向上させると報告している。(竹内香織他、2011)透析中運動療法で心身機能を向上させることで他者との交流の機会を作る足掛かりになり、今回低下していた下位尺度の QOL 向上につながると考える。

【終わりに】

今回の研究では KDQOL にて下位尺度 18 項目中 5 項目低下し、心理社会的側面に関わる QOL に多いことが明らかになった。透析中運動療法の長期介入がどのような影響をもたらすのか再度追跡調査を行いたい。